

## 博士論文最終結果報告書

看護学研究科	学籍番号 氏名	206101 垣上 正裕
論文題目 留年した看護学生の学業の継続・推進に向けて教員が実践している支援 －教員個々の教育実践への研究成果活用を旨として－		

### 審査委員

区分	職名	氏名
委員長	教授	大澤 真奈美
委員	教授	飯田 苗恵
委員	教授	行田 智子

### 論文の要旨

本研究は、留年した看護学生の学業の継続・推進に向けて教員が実践している支援を明らかにするとともに、その研究成果を教育実践へ活用する可能性について検討し、看護教育における留年学生支援の充実に向けた示唆を得ることを目的とした研究である。

研究は2段階で構成された。第1段階では、全国の看護系大学および看護専門学校に所属する教員を対象とした質問紙調査を実施し、自由記述データの内容分析を行った。その結果、留年した看護学生に対して教員が実践している支援内容が明らかとなり、それらは複数のカテゴリとして整理された。さらに、各カテゴリの性質を検討することにより、留年学生支援の全体構造が示された。

第2段階では、第1段階で得られた研究成果を教材化した研修を実施し、研修受講者による量的評価および自由記述を分析した。その結果、研究成果は教員による自己の教育実践の省察を促し、支援方法の見直しや教員間連携の再構築などに活用される可能性を有することが示された。また、研究成果活用の特徴を整理することにより、研究成果が教育実践に果たす機能について考察された。

本研究は、留年した看護学生への支援という看護教育上の重要課題に対し、教員による支援実践の全体像を明らかにするとともに、研究成果を教育実践へ還元するための視点を提示したものであり、看護教育学の発展に寄与する研究として意義を有すると評価できる。

### 論文審査の要旨

審査委員会は、本論文について予備審査、個別審査および最終審査を実施した。審査においては、留年した看護学生への支援という研究課題の意義、第1段階および第2段階の研究構成の妥当性、研究成果活用の概念規定、研究目的と結果・考察との整合性を中心に検討を行った。

予備審査では、留年した看護学生への支援を対象とした研究テーマの重要性や、第1段階で得られた研究成果を第2段階の研修へ発展させた研究の独自性について評価された。一方で、第2段階研究の位置づけや「研究成果の活用可能性」の概念規定、結果と考察との対応関係について、さらなる整理が求められた。

その後の個別審査においては、研究成果活用の概念が整理されるとともに、第2段階の研究の位置づけが明確化され、研究目的、結果および考察の一貫性が高められていることが確認された。また、研究成果活用の機能についても論理的に説明されており、論文全体の完成度が向上していることが認められた。

最終審査においては、研究の背景、目的、方法、結果および考察について体系的かつ明瞭な発表がなされた。質疑応答では、研究成果活用の考え方、教育実践への応用可能性、研究成果の意義および今後の課題等について質問がなされたが、研究者は研究内容を十分に理解した上で適切に回答した。また、本研究が留年した看護学生への支援実践を可視化し、看護教育の質向上に向けた新たな知見を提供するものであることが確認された。

これらの発表および質疑応答を通して、申請者は本学博士後期課程のディプロマ・ポリシーである DP4「看護学を専攻する看護専門職として必要な高い倫理的思考力をもち、真理を探究し続ける」および DP5「革新され続ける看護学の充実・発展に向けた研究の推進に意義を見出す」を満たしていると判断した。

以上の審査結果から、本論文は博士論文として求められる学術的水準に達していると判断され、博士（看護学）の学位論文として適切であると認められた。